

2010年9月と今回の地盤変状の比較

地盤工学会第1次調査団

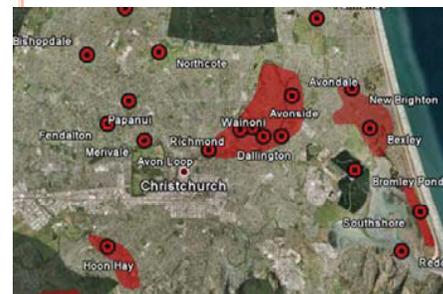
- 安田 進(東京電機大)*1
- 時松孝次(東工大)*1
- 渦岡良介(徳島大)*1
- 清田 隆(東京大)*1
- Misko Cubrinovski(Canterbury大)*2
- Orense Rolando(Auckland大)*2
- 細野康代(豊橋技術科学大)*3
- 山田 卓(東京大)*3

注:*1 日本から派遣
*2 ニュージーランド在住
*3 ニュージーランド滞在中

クライストチャーチにおける液状化範囲の比較

昨年9月の本震時

今回の余震時



(Misko Cubrinovskiらによる)

カンタベリー大学と地盤工学会で調査した液状化発生地区(中間報告)

クライストチャーチの液状化発生範囲は2~3倍

7 × 8kmの60%の広い範囲で自然堆積地盤が液状化

Bexleyでの同じ位置での噴砂の厚さの比較

昨年9月の本震時

今回の余震時



噴砂の厚さ: 約40cm

噴砂の厚さ: 約50cm

Cubrinovski准教授によると噴砂の最大厚さは昨年9月: 50cm程度, 今回: 70cm程度厚さは異常に厚い。

Dallingtonでの同じ家の沈下量の比較

昨年9月の本震時

今回の余震時



20cm程度の沈下

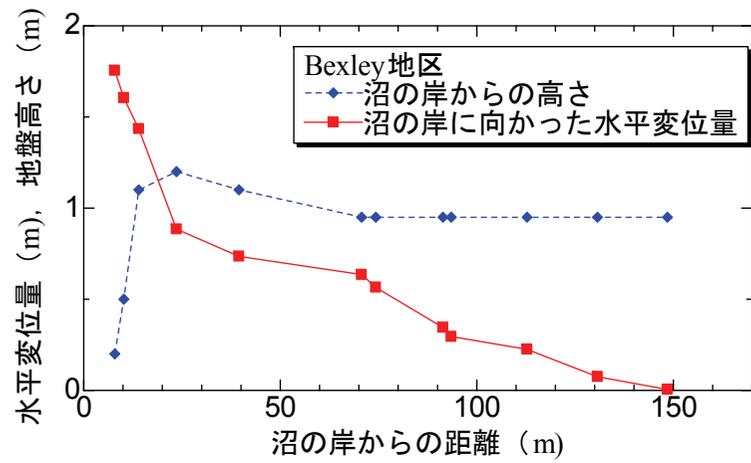
50cm程度の沈下

30cm程度さらに沈下

Bexleyでの流動変位量



(朝日新聞社のヘリコプターに同乗して撮影)



今回は深刻な斜面崩壊が発生

Sumner



(朝日新聞社のヘリコプターに同乗して撮影)

